【親鸞部門・優秀賞】

一筆書きの星

須磨学園高等学校　第２学年　井本　菜月

一筆書きで描く星の絵。誰でも知っていてとても簡単なものだが、寂しいときや辛いときに勇気をくれて、退屈な時間を輝かせてくれるかけがえのない宝物だ。

幼い頃、私は体が弱く、四十度越えの熱を頻繁に出していたため、症状が悪化して入院することが多くあった。

入院中は、左手がずっと点滴につながれていて、柵で囲まれたベッドの中で一日中過ごさなければならなかった。

また、両親は共働きで忙しく、祖父母は離れて暮らしていたため、ずっとそばに誰かがいるわけではなく、病室で一人になり寂しい時間も多かった。

そんな、入院中の退屈で孤独な時間から救い出してくれたのが、看病に来ていた祖父が教えてくれた、一筆描きで描く星の絵だった。

特別な部分は何もなく、一筆書きの星と言ったらほとんどの人が一番に思い浮かべる平凡な描き方だと思う。だが、当時の私は、

「星がめっちゃ簡単に描ける。すごい。」

と感動して、それからは絵を描くごとに、赤、青、黄色などの色とりどりの星で周りの空白を埋め尽くすようになった。

果物の絵を描くときには、周りに数えきれないほどの星を描いた。家族の似顔絵を描くときにも、似顔絵の笑顔に負けないほどにキラキラした星を大量に描いた。

星を描いているときには、退屈さも寂しさもなくなり、入院中であることさえも忘れてしまうことがあり、星がその輝きを自分にもわけてくれているような明るい気持ちになることができた。

今でも辛いことがあると、その時のことを思い出して勇気をもらう。どこにでもある星だが、私の唯一の宝物だ。